米子市歴史系博物館広報誌

NO.1 米子歴史通信

2026 創刊号
TAKE FREE

米子市
水道事業
100周年記念
企画展

2 - 3

米子の水と人の歴史

米子市立山陰歴史館

米子の近代水道事業は、大正15年（1926）の一般給水開始からはじまり、今年で100年を迎えます。米子市水道事業100周 年を記念し、米子における水と人との関わりの歴史について紹介します。

4 企画展 国史跡上淀廃寺の美を読み解く展　入門編 上淀白鳳の丘展示館

5 企画展 土の中から見つかるお金 米子市福市考古資料館

6 資料紹介 鳥取県指定保護文化財 上淀廃寺跡出土壁画のレプリカを作成しました。

7 コラム 米子の考古学史

8 表紙の文化財・編集後記

米子市立 山陰歴史館

米子市水道事業
100周年記念 企画展

米子の水と人の歴史

大正15年(1926)4月1日の上水道通水式の様子
『米子市上水道誌(昭和12年発行)』より

米子の 近代水道事業 100周年

米子で水道事業が始まり今年でちょうど100年を迎えたことを記念し、山陰歴史館を会場に、米子市水道事業100周年記念企画展「米子の水と人の歴史」を開催しました。

[会期：令和8年4月25日(土)～6月7日(日)]

米子の上水道敷設が計画された背景には、生活用水の水質悪化がありました。

明治維新以降、全国で産業・社会の近代化が進み、米子でも各種製造業の発展により町が繁栄していきました。このため産業排水が増え、人口増加も相まって、排水が大量に町の側溝や加茂川、米子城の外堀へ放流されると、河川は汚染され、汚水は井戸へと浸透していきました。米子の人々が古くから生活用水として頼った加茂川や井戸の水の汚染が原因で、明治20～30年代に腸チフス等の感染症が蔓延しました。

歴代の米子町長は、この状況を憂いて水道事業を計画し、本格的に水道敷設のための調査が始まったのは大正11年(1922)、西尾常彦(にしおつねひこ)町長(後の初代米子市長)の代の時のことでした。資金や日野川の水利問題などを乗り越え、大正14年(1925)3月10日、車尾(くずも)水源地(米子市車尾)内にて水道敷設事業の起工式を執行。総工費約61万3千円(当時)の工事の末、

大正15年(1926)4月1日、鳳翔閣(現湊山公園日本庭園内)での通水式を迎えました。

その後、昭和2年(1927)に米子市制が施行。以降、周辺町村の合併により拡大していく米子市域と増加する人口に合わせ水道事業は拡張されていき、現在に至ります。通水から今日までの100年間、米子の水道は住民の生活を支えてきました。

今回の企画展は、米子市立山陰歴史館と米子市埋蔵文化財センター、米子市福市考古資料館が連携し、「考古学」と「近世・近現代史」の両面から米子の水と人の歴史を紹介しています。「近世・近現代史」については前記の通り、「考古学」については、発掘調査で出土した遺物から水と人の関わりを紐解いています。

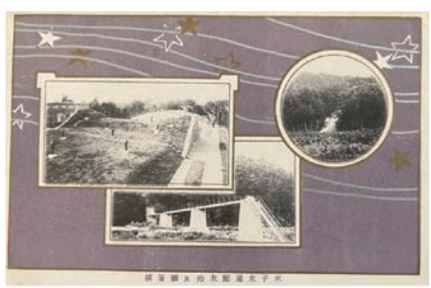
主な展示品は、今から8,000年前の縄文時代早期の人々が煮炊きに使用した縄文土器や、石をくり抜いて作った近代の井戸枠など各時代の水に関する資料のほか、大正時代に米子市観音寺の水道水源池の建設工事で破壊された水道山古墳から出土した銅鏡も展示しています。

今回の企画展では、米子の水と人の歴史をいろいろな角度から紹介しています。昔も今も人にとって水がいかに大切であったかを知るきっかけとなれば幸いです。

久米第一遺跡で見つかった井戸

観音寺山配水池の現在の様子

※会期終了後も企画展の図録は米子市立山陰歴史館受付にて販売中！(税込300円)



水道竣工記念絵葉書
[台紙(上):縦185×横121(mm)、
絵葉書(下3点):縦91×横139(mm)]
大正15年(1926)頃
米子市立山陰歴史館所蔵

上淀白鳳の丘展示館

企画展

国史跡上淀廃寺の美を読み解く！入門編

会期 4月25日[土]▼6月28日[日]

国史跡上淀廃寺跡国指定30周年

上淀廃寺跡は飛鳥時代後期（683）ごろに創建された古代寺院で、平成3年（1991）に日本最古級とされる彩色仏教壁画片などが多数出土しました。廃寺跡は平成8年（1996）国史跡に、出土した壁画・塑像等は平成21年（2009）に鳥取県保護文化財に指定されました。

本展は上淀廃寺跡の入門編として位置づけ、上淀廃寺跡のガイダンス施設として、これまで当館が実施してきた上淀廃寺跡関連企画展での展示パネルや壁画の加熱実験検証結果など過去の実績と、昨年度米子市が作成した≪神将≫≪菩薩≫の2点のレプリカの公開を行い、質問形式の問いかけパネルを読み解きながら多角的に≪上淀廃寺≫の魅力や”謎”について興味関心をもっていただけるよう展示構成しました。

本展を機会に、この貴重な歴史遺産に興味・関心を高めていただけたら幸いです。この機会にぜひご来館ください！

彼岸花の植栽in上淀廃寺跡

上淀廃寺跡が国史跡に指定されて今年で30年を迎えます。平成23年（2011）に、廃寺跡の整備と共に上淀廃寺のガイダンス施設としてリニューアルオープンしたのが「上淀白鳳の丘展示館」です。いつでも出土した壁画・塑像類をご覧いただける施設となっています。

現地では、平成23年度以降、地元の方々等によるボランティアで遺跡の保全と活用を兼ねて彼岸花の球根を植える「彼岸花の里づくり」の活動を行ってきました。秋の彼岸のころに廃寺跡に朱色の花が咲き、その花を見に出かけてくださるたくさんの方々の姿を想いうかべ、毎年球根を植え続けてきました。植え付けが始まって今年で13回を迎え、この間の参加者は1000人を、植え付けた球根は5万球を超えました。地元の高校生・中学生・小学生・保育園児など次世代を担う子供たちの参加も増えています。植え付けに参加くださった皆さん、ご協力ありがとうございました!!

米子市福市考古資料館

企画展

土の中から見つかるお金

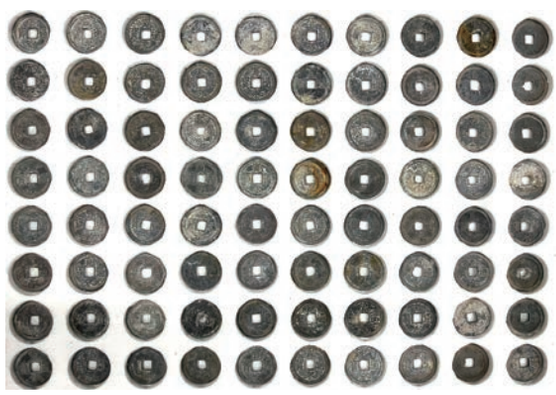
会期 4月22日[水]▼7月20日[月・祝]

米子の遺跡で見つかるお金が大集合！

発掘調査を行うと、古代の遺跡から銭貨（お金）が見つかることがあります。米子市内では、諏訪西山ノ後遺跡から奈良時代の胞衣埋納容器とともに「和同開珎」が見つかっています。「和同開珎」は、708（和銅元）年から律令国家を目指して初めて発行された銭貨です。

中世になると、日宋貿易が盛んにおこなわれ、北宋銭といった中国の銭貨が日本でも使われるようになり、近世には、金・銀・銅の三貨制度が始まり、公式な通貨として「寛永通寶」が発行されるなど、古代以降、銭貨は人々の生活の身近なところにありました。

今回の展示は、生活に必要なお金がいつから使われるようになったのか、また米子市内のどんなところからお金が出土するのかを紹介しています。



大量の出土銭
江戸時代　米子市富益

土師器甕（胞衣容器）・和同開珎・刀子・鋤先
奈良時代　諏訪西山ノ後遺跡

諏訪西山ノ後遺跡の胞衣埋納遺構

胞衣とは胎児を包んでいた胎盤のことで、出産後に子どもの成長を願い、容器に入れた胞衣を土間や門口などに埋めました。奈良時代には胞衣とともに、銭貨・墨・筆・刀子などを納めた例もあります。

諏訪西山ノ後遺跡では、1981年の発掘調査で奈良時代の掘立柱建物の脇に埋められた土師器甕の中からは、鉄製の鋤先と刀子、和同開珎3点、墨挺状炭化物（唐墨か）が見つかりました。遺物の内容や出土状況から胞衣埋納遺構と考えられています。

資料紹介

鳥取県指定保護文化財 上淀廃寺跡出土壁画のレプリカを作成しました。

神将（左）と菩薩（右）の壁画のレプリカ

■ 国内最古級の彩色仏教壁画片

米子市では、令和7年度（2025）に国史跡上淀廃寺跡から出土した彩色仏教壁画のレプリカ（複製品）を製作しました。

上淀廃寺跡は、平成2年（1990）から行われた発掘調査で金堂跡の周辺から約1300点の彩色仏教壁画片が発見され、法隆寺金堂の壁画に次ぐ資料として、全国的に注目されました。当時の過熱した報道によって、現地説明会に見学者が殺到した様子は、30年以上経った今でも壁画フィーバーの一コマとして語り草となっています。

現在では、出土品の一部が展示館に常設展示されているほか、その他の出土品は、温湿度が管理されている米子市埋蔵文化財センターの特別収蔵庫に厳重に保管されています。

講演会での壁画レプリカの展示

■ 出前授業や講座での活用

今回製作したレプリカは、「神将（しんしょう）」と「菩薩（ぼさつ）」の2点です。上淀廃寺跡の壁画は、金堂の土壁の上に薄く塗られた白土（はくど）の面に描かれているため、破損しやすく、移動の際 には細心の注意が必要でした。

また、彩色された壁画の保存処理についても日本国内では前例がなかったため、壁画表面の強化に昔ながらの「フノリ※」を使用するなど、いまだに手探りの状態が続いています。

このように、表面が脆弱な状態に置かれている壁画は移動させることが困難なため、他館への貸出業務以外では展示ケースから壁画を取り出すことはほとんどありませんでしたが、これからは学校の出前授業や公民館講座などで気軽に壁画のレプリカを活用できるようになりました。

学芸員による上淀廃寺跡出土壁画のレプリカを用いた出前講座の詳細につきましては、上淀白鳳の丘展示館までお問い合わせ下さい。

※フノリとは、海藻を原料とする糊のこと。

コラム

米子の考古学史

養良校での遺物見学

明治34年（1901）7月31日に大山町逢坂（おうさか）の橋井半雲（はしい はんうん）宅にて石器を見学した東京帝国大学の坪井正五郎（つぼい しょうごろう）は、翌8月1日に淀江町今津（よどえ いまづ）にあった養良（ようりょう）高等小学校を訪れ、ここで展示されていた遺物を見学します。

案内役は校長の足立正（あだちせい）で、ここにあるものは、自らが収集した出土品や学校関係者から寄贈された考古資料が中心でした。これらを見学した坪井から、足立に遺物の出土状況などについて質問があったようです。

しかし、時間の都合からか、この日は現地見学は行われず、養良校の楼上から福岡平野の方向を指さしながら、足立がこの地域の古墳の概要を説明しています。おそらく、この時の説明で石馬の話も出たことでしょう。坪井も、まだ見ぬ石馬に期待が高まっていったと思われます。

そして、最後に坪井が「人類学者の眼に映ずる古物遺跡」と題する講話を行いました。

この時の講話は、当日並べられた出土品について、坪井自らが一つ一つ遺物を手に取って解説する内容だったと思われますが、これまで周辺の考古資料を地道に収集してきた足立にとっては「闇夜に灯火を得た心地」で、この話を聞き、感激した足立が「伯耆国西伯郡高麗山麓の古窟（ほうきのくにさいはくぐんこうれいさんろく こくつ）」の原稿を坪井に贈呈します。これを見た坪井は、東京人類学会雑誌へ寄稿することを勧め、この原稿が雑誌に掲載されたときには、末尾に「坪井博士の探討」の項目がつけたされたと考えられます。　（米子市埋蔵文化財センター　佐伯）

※本編は、これまで『米子市埋蔵文化財センターたより』に掲載していた「米子の考古学史」を引き継いでいます。

『鳥取縣史蹟勝地調査報告第二冊 因伯二國に於ける古墳の調査』（1924）の写真図版より、
淀江町より望める宇田川村福岡の古墳群（電線が見えるので、大正10年以降に撮影されたものと考えられる）

表紙の文化財

米子市役所旧館

米子市指定有形文化財

米子市立山陰歴史館の建物は、昭和5年（1930）に建てられた米子市役所の庁舎を活用したものです。建物が竣工した当時の米子市の人口は3万人ほどでしたが、将来の人口を10万人と想定して、この庁舎が建てられました。

建物の設計は、数多くの庁舎の建築を手がけた佐藤功一（さとうこういち）で、早稲田大学大隈講堂や日比谷公会堂の設計者としても知られています。

建物は鉄筋コンクリート三階建てで、一階の外壁が人造石でアーチ状の窓から目地が伸びるのがアクセントになっています。二階と三階は赤レンガ調のスクラッチタイル貼りで、夜にライトアップされた外観が美しく、米子の夜の風景として親しまれています。内部はかなり改装されていますが、展示室のカウンターや、三階の貴賓室（きひんしつ）は竣工した当時の面影を残しています。

この建物は、昭和52年（1977）に市の有形文化財に指定されています。

ライトアップされた山陰歴史館

編集後記

昨年度までは、米子市立山陰歴史館と米子市福市考古資料館、米子市埋蔵文化財センターの3つの施設で広報誌を作っていましたが、今年度から米子市文化財団が指定管理者を務めている歴史系施設4館合同で広報誌を刊行することとなりました。以前の広報誌は、白黒での印刷でしたが、これからは紙面をカラーにして、明るく見やすい紙面作りを目指します。

今後は、季刊紙として、米子市の歴史・文化や最新の文化財情報をお届けしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

「米子の考古学史」は、『米子市埋蔵文化財センターたより』からコラムを引き継ぎました。明治時代に米子が考古学の先進地となっていく過程を振り返る長期連載企画です。過去に刊行した広報誌は、米子市立山陰歴史館と福市考古資料館、米子市埋蔵文化財センターのホームページで見ることが出来ます。

米子市歴史系博物館広報誌
NO.1 2026 創刊号
米子歴史通信
令和8年（2026）6月25日発行
編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団
［米子市立山陰歴史館・上淀白鳳の丘展示館・米子市埋蔵文化財センター・米子市福市考古資料館］

米子市立山陰歴史館
〒683-0822　鳥取県米子市中町20
TEL0859－22－7161
休館日：毎週火曜日（祝日の場合翌平日）、年末年始
開館時間：9:30～18:00（入館は17:30まで）

上淀白鳳の丘展示館
〒689-3411　鳥取県米子市淀江町福岡977-2
TEL0859－56－2271
休館日：毎週火曜日（祝日の場合翌平日）年末年始
開館時間：9:30～18:00（入館は17:30まで）

米子市福市考古資料館
〒683-0011　鳥取県米子市福市461
TEL0859－26－3784
休館日：毎週火曜日（祝日の場合翌平日）祝日の翌日（土、日、祝の場合を除く）年末年始
開館時間：9:30～17:00（入館は16:30まで）

米子市埋蔵文化財センター
〒683-0011　鳥取県米子市福市281
TEL0859－26－0455
休館日：土・日・祝日、年末年始
開館時間：9:00～17:00（入館は16:30まで）